早稲田大学創立125周年記念事業図書館企画「角田柳作展」に向けて

昭和30年（1955）、雑誌「早稲田学報」誌上の座談会の席上、東洋の歴史や宗教をアメリカ人の学生に教えているとどのような受け取り方をするのか、異質なもの、奇妙なものというふうにとらえるのか、という福井康順の質問に対し、角田柳作（つのだ りゅうさく.1877～1964）は、自分がコロンビア大学でしている講義の受け取り方は学生個々によって違う、とこたえてから、さらにつぎのように発言している。

「私は良くスリーエルスという事をいうのです。文化というものもせんじつめると、法・願・行の三つからできていると思うのです。法はlawという字で訳し、本願をloveという字で訳し、行という字をlabour,労働という字で訳してスリーエルスと読んでいるんです。この三つが宗教の骨髄でもあると思うのです。」

長年、異郷の地ニューヨークにあって、日本の歴史、宗教と思想をアメリカの学生に教えるというきわめて困難な仕事をした角田柳作は、われわれの先輩である。明治29年、東京専門学校文学科を卒業している。

角田柳作は群馬県に生まれた。在学時には、大西祝や坪内逍遙の授業に出ている。卒業後、真言宗高等中学林、福島中学などで教えたのち、明治42年、ハワイに渡る。

さらにアメリカ本土に移り、伝統ある名門校であるニューヨークのコロンビア大学に、「日本文化研究所」を創設した。彼はそこで、アメリカ全土でも有数の日本語図書のコレクションをつくりあげるとともに、教壇に立ち、ジョージ・サンソム、ハーバート・ノーマン、ドナルド・キーンをはじめ多くのすぐれた日本・東洋学研究者を育成した。日米戦争のはじめには、スパイの嫌疑で逮捕されるという試練にあったが、強い信念と高潔な人柄により、アメリカの人々の尊敬と敬愛を集め、日米文化の架け橋としての生涯をまっとうした。

このような人物が学苑の先輩にいるということを、今日の早稲田大学の学生のほとんどは知らない。角田柳作の名前は、その尊敬すべき業績にもかかわらず、これまで日本では知られていなかった。わずかに、近年、司馬遼太郎が『街道をゆく』の中で角田について触れている程度である。

早稲田大学創立125周年記念事業に参加する図書館企画として、「角田柳作展」の実施を起案したのは、およそそのような状況を深く遺憾としたからにほかならない。

大方の賛同を得て、この企画は大学としての正式企画として承認された。2006年5月末、紙屋図書館長（当時）、中元・松下がコロンビア大学を訪れて、角田柳作顕彰の企画について協力を依頼した。早稲田大学とコロンビア大学は、大学間でも、また図書館間でも交流協定を結んでおり、コロンビア側からも全面的かつ絶大なご協力をいただける旨の返事がかえってきた。有名な話だが、コロンビア大学では、日本語で「先生」といえば角田柳作のことを意味したといわれている。

また角田柳作ご令嬢である星野富士子さん、曾孫にあたる角田卓也氏、柳作長兄角田保太郎のご子孫で柳作研究者でもある角田修氏らからもご協力いただけることとなった。

2007年度に予定している企画はつぎのとおりである。

「角田柳作記念文庫」の創設と公開

1964年、角田が帰国を前にしてハワイの地で客死した後、コロンビア大学東アジア図書館の甲斐美和さんから、角田の蔵書が継続的に早稲田大学図書館に送られてきた。図書館ではこれをまとめて整理をすすめ、このほど「角田柳作記念文庫」と名づけ中央図書館研究書庫で公開するはこびとなった。40年以上前、早稲田の大浜総長（当時）とコロンビア大学のカーク学長との間で交わされた話がようやく実を結んだことになる。

展覧会（角田柳作展）

この企画のメイン行事として、角田柳作に関する展覧会を、125周年記念式典当日を含む2007年10月20日から11月30日まで、早稲田大学「大隈タワー」10階にある「125記念室」において開催する。展示は角田柳作の生涯を時系列的にたどるものとし、「角田柳作とはどういう人だったか」ということが、わかりやすく理解できるものとしたい。同時になるべく充実した展示目録を編集刊行し、角田の業績を顕彰する予定である。幸いにして各方面のご協力を得て準備は進んでいる。

シンポジウム角田柳作

展覧会開催期間中の2007年10月30日に、早稲田大学国際会議場１階井深大記念ホールにおいて、角田柳作の生涯にわたる業績、またその影響および今日的意義をめぐって、コロンビア大学および早稲田大学それぞれの研究者を中心として幾人かのパネリストを招待しシンポジウムを行う。角田柳作の先駆的業績をひろく世に知らせる機会となればよいと思っている。可能であれば、適当な時期にニューヨークでも同様の催しを開催したい。

図書館では、これら一連の行事の企画委員会を2006年度から立ち上げ、活動を開始している。資料調査、リストアップ、シンポジウムの構成などにつき、すでに具体的な検討作業に入った。企画委員会のメンバーは早稲田大学、コロンビア大学双方から出し、緊密に連絡をとりつつ進めている。

角田柳作のような人物の存在は、イェール大学にいたやはり早稲田出身の朝河貫一とともに、日米双方にとって忘れてはならぬ大切なものである。本企画の成功が、角田先生がめざした国際交流と国際理解の一助となることを強く願うものである。